言心先生の中国便り

謠言と遥言

まず、謠言と言う中国語を説明する。この言葉の意味は、日本語のデマと言う言葉に似ている。つまり、意図的に流される虚偽の情報である。

最近、中国のネットで色々な情報が、流されている。これらの情報の衝撃度は、人間の想像力を遥かに超えた。例えば、2月6日、重慶市の副市長王立軍氏が、成都のアメリカ領事館に駆込んだ原因である。中国在住の英国商人ニール・ヘイウッド氏が、重慶市の共産党書記長薄熙来氏の夫人の経済利益の紛糾で、殺された。毒薬の提供者が、重慶市の高級官僚で、殺人の実行者が、夫人の秘書である。証拠を隠滅する為、殺害後、直ちに、死体を火葬した。当時の公安局長の王氏は、この事件の調査について、薄氏に報告した。薄氏は激怒して、王氏に横面を張って、その場で、王氏を免職した。また、王氏の部下の十数人を監禁し、その中の二人が殺害され、一人が自殺した。王氏は、身の危険を感じ、アメリカ領事館に逃げ込んだ。

ネット上の情報に対して、中国の官製媒体が、これらの謠言(デマ)を絶対に信じることは出来ないと呼びかけた。

4月10日深夜、新華社が、薄氏と夫人に深く関わる重慶事件の一部事実を公表した。その前のネット上の謠言が、ほぼ一致したのである。ネット上で、大騒ぎになった。一人のネット利用者は、我々が流している謠言は、謠言ではなく、遥言で、つまり、遠い未来の予言である。中国語で、謠言と遥言の発音は、全く同じである。遥という漢字は、日本語の「遥か」の意味と同じく、「遠く」である。彼は、謠言の解釈が、本当にうまい。所謂、一言的中だと思う。

日本ではデマが少ない。あっても、せいぜい自然災害に限られている。人と事件に関するデマが、あまり流されていない。日本においては、言論自由の国家、完全・自主・自由なマスコミが、社会の中で重要な役割を果たしている。当然、デマが流行ることは、非常に限られている。

国民の言論自由を尊重し、独立な報道機関は事実しか報道しない。また、全ての国家官僚を法律の下でしか活動出来ない状態になれば、デマを作る人が少なく、信じる人も少なくなる。しかし、中国で実現出来るのは、遠い未来の事かも知れない。

これは、筆者が流す遥言である。